
妄想の世界

兼一郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妄想の世界

【Nコード】

N0645Z

【作者名】

兼一郎

【あらすじ】

この小説は『魔法少女リリカルなのは』の二次創作です。

小説の内容は現実の世界から唐突にアニメの世界に無意識の内に移動してしまった人間が元の世界に戻る為に頑張らしよう、という健気でよくある二次創作のお話です。

二次創作もとい小説を書くのは生まれて初めての経験なので生暖かい目で作品を読者の方々に読んで頂ければと思っています。

『魔法少女リリカルなのは』の二次創作はたくさんありますが、そんな先の先人たちの作者様方の作品に私の作品が埋もれないように

頑張りたいと思っております。

注意事項

『魔法少女リリカルなのは』の二次創作です

この小説を読むにあたって以下の注意事項を読んでください

- ・ 作者はまったくの素人で小説を書くのは初めてです
- ・ 非転生のオリジナル主人公がこの小説の主人公です
- ・ 原作キャラクターを私なりに表現していますので原作とイメージが合わなくなるかと思っています

- ・ 小説の更新ペースが遅いです

以上の注意事項を読んでそれでも読んであげましょうという読者様方

作者の駄文ですが少しでも楽しい時間に費やせたらいいと思います

第1話

壁に架けられた丸時計が午前1時を針で指し示していた。

人の出入りが疎らになった深夜のコンビニで会計を済ました若い男が片手にコンビニ袋を携えてコンビニから優々とした態度で出てくる。

若い男の名前は速水健一。はやみけいち

歳は二年前に成人を迎えた二十二才。

今年、私立の大学の卒業をまじかに控えている大学四年生である。一年間という期間をかけて制作した卒業研究の発表を明後日に控え、自宅の自室でパソコンを前に缶詰状態だったので寝不足気味の健一はコンビニで軽い夜食を買い付けに来ていたのだ。

健一はコンビニ前に停めていた自分の自転車の前カゴに夜食の入った袋を放り、自転車に跨るとペダルに足を降ろした。

深夜の静寂な雰囲気の中、健一の乗った自転車が人気のない住宅街の街道を街灯に照らされながら人が歩くより若干早い速度で進む。

「俺も今年から社会人かあ……」

寝不足で思考がうまく纏まらない健一は唐突に独り言を呟いた。

四年間という大学生活に区切りをつけて今年、健一は四月を迎えると新社会人となる予定だ。

大学で友達が一人もない自分が、まさか内定をいただける企業があったことに健一は大学の卒業をまじかに控えた今でも信じられない。

”お前が想像している以上に社会は甘くないぞ”ふと健一の頭の中で厳しい彼の父親の言葉が唐突に過ぎる。

内定が中々決まらずに卒研も就活も諦めて部屋で閉じこもっていた健一に父が鉄拳制裁と共に彼に言った言葉だ。

健一の頬に熱い熱がこもる。嫌なことを思い出した、と健一は感情を高ぶらせペダルを漕ぐ足に力をこめた。

人気の無い住宅街を自転車を通り抜けようとペダルを漕ぐ健一に突然、違和感が訪れる。

健一の頭の中に唐突な頭痛を伴う耳鳴りが響くと同時に、彼が立つアスファルトの地面が縦横に波をうって大きく揺れたのだ。

「地震っ?!」

頭痛を伴った突然の大きな地震に自転車のハンドルを握るのが困難なほどに健一は驚いた。

だが、健一の周囲に佇む住宅街の家々は地面を大きく揺らす地震にまるで気がついていないように家の明かりひとつ、悲鳴ひとつあげることなく静寂だった。

自分と周囲の温度差に違和感を感じながらも、健一は狼狽しつつ揺れる地面に逆らいながらなんとか自転車のペダルを漕ごうとした。ふと、健一は深夜の夜空に視線を移した。そこには風になびくカーテンのようなドス黒い何かが夜空の暗幕をオーロラのように揺ら揺らと波打ってなびいていた。

その不可思議な夜空の現象に健一は驚愕して目を奪われるが内心ではとても気分が良いものではなかった。

普通のオーロラは見るものを惹きつけて魅了するが、健一の見たソレは見るものに不快感と嫌悪感そして苛立ちを与えるのだ。

「うっ……!？」

健一の身体に異変が唐突に起きる。

健一は自転車の足を止めて深夜の住宅街の街灯の下で胸の内から込み上げてくる吐き気を抑えるようにその場で立ち止る。

「……………うっ……………おえあ……………」

健一は口元を両手で覆いながら吐き気に堪えず自転車スタンドを立てることもせず、その場で自転車を乱雑に倒した。

自転車の前カゴから放り出されたオニギリとサンドウィッチが地面に点々と転がり落ちる。

「……………も、もう、無理……………おええ……………」

唐突に襲われた原因不明の吐き気に堪えられずに健一は胸の中にあつた不快なモノを盛大にアスファルトの上に吐露した。

腹の中にあつた不愉快なモノ全てを吐き出すまで健一は肩で息をしながら吐き出し、衰弱して虚ろな瞳を浮かべると地面に吐露した汚物の異臭に眉をひそめた。

健一が吐く物を吐いてスッキリした落ち着いた頃には地面を揺らす地震も夜空に映る奇妙なオーロラも全て何事もなかったように身を潜めた。

「いったい、なんだったんだ……………」

突然、自分の身を襲った吐き気と異常気象と天変地異に健一は怪訝に思いながらも深呼吸をして体調を整える。

健一は地面に投げ出された食料を拾いあげて自分が吐露した汚物を遺憾ながらもそのまま放置して再び自転車に跨ると自宅に向かってペダルを漕ぎ始めた。

健一が彼の自宅に到着したのはコンビニを出てから一時間程、時間が経過した頃だった。

いつもより倍の時間をかけて帰宅した健一は自宅の庭に自転車を停めるとコンビニの袋を片手に自宅の玄関に向かう。

ポケットにしまつてあつた家の鍵を取り出して玄関の扉の鍵穴に

鍵を差込み左に回す。鍵が開いた玄関の扉を開くと「ただいま」と寝静まる家族に挨拶をしてから家に入った。

健一は玄関から家になると明かりの灯らない廊下を進み、寝ているだろう家族を起こさないように抜き足で階段を二階へと昇って自室に向かった。

普段どおり自分の部屋まで辿り着いた健一は部屋の扉を前にして唐突な違和感におそわれた。

「なんだ、これ？」

違和感の正体は部屋の扉に『まよの部屋』というフアンシーなネームプレートが飾られていることだった。

コンビニに行く前には無かった、身に覚えの無い飾りに何かがおかしい、という違和感を抱きながらも健一は扉を躊躇い無く開いた。開かれた扉の先にあったのは速水健一の部屋であるはずである。だというのに健一の視界に映ったのはまったく別の主が住んでいる部屋だった。

扉を開いた瞬間に匂う女の鼻を突く香水の匂い。女々しい部屋のインテリアに彩られた男っ気が全く無い部屋の内装。そしてベッドの上で吐息をたてて寝ている見知らぬ若い女。

「……えっ？」

健一は絶句した。この場は確かに自分の家の筈だし、ここは自分の部屋だったはずなのにいつの間にか自分の知らない女が住み着いていたのだ。

部屋の内装も必要最低限のモノしか置いていなかった健一の部屋は今では女々しい若い女仕様の居心地最悪な景觀へと様変わりしていたのだ。

コンビニに出かける前までは確かに自分の部屋だったはずなのに、

この短時間でどうやったらここまで部屋の内装を入れ替えることが出来るのか、そしてこの寝ている女は誰だ、など色々と頭を痛ませる疑問が尽きないがとりあえずは健一は行動をおこした。

「あの、ちょっと。ここ俺の部屋なんですけど……！」

勝手に自分の部屋を改造して我が物顔で寝ている若い女に健一は彼女の肩を激しく揺すって起こそうとした。

「……うーん。まだ早いよお。寝かせてよお」

肩を揺する健一の手を払いのけて女は再び吐息をたてる。

「ちょっと、あんたっ！　いかげんにして起きろってばっ！」

若い女のいっこうに目覚めそうに無い態度に健一は怒って毛布を引っぺがすと女をベットの从上から強引に引きずりおろそうとした。

これにはさすがに堪えたのか、若い女は意識を覚醒させると額に青筋を浮かべる健一に文句を言った。

「もう、やめてって言うてるでしょっお父さ……ん？」

目を覚ました若い女は悪態をつきながら健一の顔を凝視した。そして直ぐに驚愕した様子でベッドから飛び起きると健一から逃げるように部屋の角へと後退した。

「あ、あ、あんたっ！　いったい誰なのよっ!？」

若い女は長い髪を寝癖で乱れさせながら狼狽する。

女の意味不明な台詞と態度に健一はそれはこちらの台詞だと、怒

りを露にした。

「それはこっちの台詞だっ！　ここは俺の部屋だったの！」

「はあ？！　なに言ってるのよ！　ここはあたしの部屋だったの！」

「いつからここが女の部屋になったんだよ！　ここはずっと前から俺の部屋だ！　出て行けっ！」

「なに意味のわからないこと言ってるのよ！　出て行くのはあんたの方よ！」

「なんだとう！」

健一は自分の部屋を勝手に模様替えしたにも関わらず部屋から出て行く気配さえ見せない傲慢な態度の女に拳を振り上げて詰め寄った。

健一に詰め寄られて身の危険を感じ取った女は顔を恐怖に引きつらせる。

「お父さーっんっ！　お父さんっ！　助けてーっ！　早く来てーっ！」

耳の鼓膜を過剰なまでに振動させる甲高い若い女の悲鳴に健一は目を白黒させて驚き、その場でたじろいだ。

深夜の住宅街の全域に響き渡るような悲鳴に家の周りにある家々の窓に光が灯る。

「どうしたんだっ！？　マヤっ！」

娘の悲鳴を聞きつけてドタドタと慌しく家中に足音を響かせて一階で寝ていた彼女の父親が二階に上がって来るとすぐさま健一の部屋に乱入してきた。

涙目で身体を竦ませながら部屋の隅で震える娘と見知らぬ若い男が娘に乱暴をはたらこうとしている瞬間を目撃した父親は健一に殴りかかった。

「うちの娘に何をした貴様あーっ！」

突然の不意打ちによる奇襲によって健一は為す術も無く自分の知らない他人の父親に顔面をタコ殴りにされた。

状況が全く理解できない健一は娘の父親に殴られながらも「あんたらこそ俺の家でなにしてんだ！」と逆上しながらそれに応戦した。健一と娘の父親による大乱闘が狭い一室で行われている間に家の一階では娘の母親が受話器を手に取り警察に通報していた。

深夜の住宅街に響くパトカーのサイレンの音。その音を聴きつけて住宅街の家々から野次馬が飛び出してくる。

「娘の部屋に知らない男が……！」

家の一階から聞こえる母親の泣きそうな声。他人の父親と殴りあいをしながらも健一の耳にはその声がはっきりと聞こえた。

複数の人間が慌しく階段を上ってくる足音。そして健一の部屋にゾロゾロと大所帯で現れた制服に身を包んだ公僕ども。

「若い男の身柄を拘束しろっ！」

公僕のひとりの一声でその仲間達が暴れる健一の身柄を容易く拘束した。

多勢に無勢とはこのことか。健一は大人しく公僕に身柄を拘束さ

れながら「ここは俺の家だ！」と一点張りの主張を続けた。

だが詳しい話は署の方で聞く、と警察官に話を聞いてもらうことも出来ずに健一は身柄を拘束されたままパトカーに乗せられた。

「……それで君は自分の部屋に戻ってきたら見知らぬ人間が居ただけだ、と言いたいんだな」

「だから、さっきからそう何度も言っているじゃないですか！」

ここは警察署にある取調室。パイプ椅子に座り事務机を挟んで健一と警察官が問答をしていた。

「だが、あの家に速水健一という男が住んでいるなんて届出は出ていない」

「そんな馬鹿な！？　だって俺はあの家で家族と一緒に二十二年間住んでいたんですよっ！」

唐突に告げられる冗談にしてもたちの悪い真実に健一はありえないと頭を横に振った。

「だから、君がいうその家族も速水健一が住んでいたなんて記録はどこにもないんだ」

「そんなことがあるわけがないですっ！　俺と家族は確かにあそこで暮らしていたんですよ！」

事務机を激しく叩いて健一が警察官に激しく抗議するが警察官は依然と健一の供述を信じようとはしない。

そして警察官はおもむろに制服の内ポケットから事務机の上に健一の運転免許証を提示した。

「話が変わるが、君から押収した財布の中に入っていた自動車の免許証のことなんだが……」

事務机の上で自分を見つめる運転免許証の写真の自分を指で指し示しながら健一は抗議する。

「ほら、ここを見てください！ 免許証に自宅の住所が書いてあります！ これが俺がアソコで住んでいる証明になるはずです！」

身分を証明するのに便利な免許証を警察官の前で示すことで健一は自分の口述に嘘は無いと言いたかった。

だが、警察官は健一の言葉に眉をひそめると不機嫌そうに顔をしかめた。

「そうならないんだよ。これさ、よく作られてはいるが君の持っていた免許証は全くの偽物だ」

「……えっ？」

健一は信じられない、と首を横に振り警察官の瞳をすぐるような目で見た。

そんな健一の視線を目を逸らして警察官はイライラした苛立ちを表情に露にしながら厳しい口調で言う。

「どこでこんなモノを作ったんだ？」

「俺はそんなことしていません！」

「じゃあ、どこで手に入れたんだ？」

「俺はちゃんと教習所に通って、免許センターで試験に合格したから、その後に発行してもらって……」

「嘘を吐くんじゃないっ！」

ドンっ！と警察官が健一を脅すような表情で事務机を叩いた。机を叩かれて健一は身をビクッと竦ませる。

「持っている免許証は偽物といい、さっきからデマカセの供述しかない。警察を舐めてんのか！」

「俺は嘘なんて言っていませんよ！」

「それが嘘だって言ってんだ！ 正直に話さないようならこちらにも考えつてもんがあるんだぞ？」

警察官はその場で椅子から立ち上がると乱暴に速水の胸倉を掴み、拳を握り締めて振り上げた。

胸倉をつかまれて息が詰まりそうな状態で涙目ながらも健一は警察官に自分は嘘を吐いていない、と供述を続けるがその口に警察官の握り拳が叩き込まれた。

顔を正面から殴られて鼻を押さえながら床にうずくまる健一に警察官は更に乱暴を続けた。

「ほら、はやく本当のことを言え！ こっちはな、お前の戸籍すら無い事は判っているんだ！ おまえ、さては日本人に成りすました不法入国者だな？」

「お、おれは、日本人だし……戸籍が無いなんて、ありえるはずがないですよ……！」

警察官に床にうずくまり身体を足蹴にされながらも健一は声を大にして叫んだ。

「口答えするな！ 現に貴様の戸籍が無かったんだからお前は不法滞在者になる。おまえ、どこの国から日本に来たんだ？ 目的はなんだ？ 金か？ 女か？ それともクスリか？」

「そんな身に覚えの無いことを、俺が知っているわけがないじゃないですか……！」

「まだ言うかつ！ この犯罪者の分際で調子に乗りやがって……！」

無抵抗な健一を暴力で屈服させる尋問は一昼夜続けられた。

尋問の結果、健一からロクな情報を聞き出せなかった警察は健一の身柄を拘束して警察署にある拘置所に一旦、閉じ込めることに決定した。

警察に心身ともにボロボロになるまで身に覚えの無い罪で尋問を続けられた健一は冷たくて暗い拘置所の中で三日間、獄中生活を続けさせられることとなった。

三日間の獄中の中で健一は自分の身に起こった出来事を頭の中で整理しようとしていた。

コンビニに買い物に行った帰りに奇妙な出来事と吐き気に襲われた。

次に健一が自宅に戻るとそこは見知らぬ他人が住んでいる彼の自宅ではない他人の家だった。

そして健一が持っていた本物のはずの免許証は偽物で彼の戸籍が

嘘のように抹消されていた。

……まるでパラレルワールドに迷い込んでしまったようだ

現実的な考えではない御伽話のようなキチガイじみた考えを獄中にいる間に健一はそう結論づけることとした。

どこか自分の知らない、でも、とても自分の知っている世界によく似た他の世界に突然迷い込んでしまったのだ。

健一はそんな途方もない妄想を頭の中で考えつつ、この妄想とも現実とも判断出来ない世界を憎んだ。

警察官からの理不尽な暴力による憎しみ。自分の居場所をどこの馬の骨とも知れない他人に奪われた憎しみ。大学の卒業をまじかに控えていたのに全ての苦労が水の泡と消えた憎しみ。

……憎い、憎い、憎い、憎い。

そんな理不尽な現実に、自分の平穏な生活を唐突に奪った現実に健一は獄中の中で世界を呪った。

一台のパトカーが都心の大通りを車の流れに身を任せながら走っていた。

そのパトカーに乗車しているのは運転手の警察官が一人と後部座席にはひとりの若い青年を挟み込んで座る警察官二人。合計で四人の人間がパトカーに乗車していた。

このパトカーは不法入国と不法侵入それから身分詐称に偽造という罪を負った容疑者の青年を刑務所に移送する任をおびていた。

慎重な運転でパトカーは人通りが激しい道路の交差点に差し掛かると赤信号につかまりその場で信号待ちの車列に加わった。

「おい、あれなんだ？」

その声は交差点で信号待ちをしていた彼女を連れた年若い男の声だった。

「えっ？ なにか言った？」

年若い男の隣で佇み、彼と一緒に信号待ちしていた彼女は交差点の騒がしい人々の喧騒に耳を奪われて彼の言葉が良く聞こえなかったので聞き返した。

「ほら、あれだよ、あれ」

彼は天高く頭上を指差して彼女に指し示した。それに釣られて彼女は彼が指差す方に視線を移す。

交差点の周りに伸びるビルの間から覗く狭い空に輝く一点の蒼い光。それは真昼の快晴の空の色よりも濃厚な蒼の色だった。

「ほんとうだ。でも、とっても綺麗な光……」

どんな深い海の色よりも蒼く、どんなに天高く仰ぐ蒼穹の空よりも綺麗な蒼の光に彼女は目を奪われた。

交差点で信号待ちをしている他の人間たちもその蒼い光に気が付くと皆が空を見上げた。

「あれ？ なんだか、あの光が近付いてきているような……」

視界に映る蒼い光りが段々と光源を空に広げて天から地へと落ちていく。落下予想地点は都心の交差点。人間が蟻のようにひしめく都会のと真ん中だ。

「やばいんじゃないのか……！」

真っ直ぐに自分達の居る場所に向かって堕ちてくる正体不明の蒼い光に若い男は慌てた様子で彼女の手を握りるとその場から逃げ出すように踵を返した。

そんな一組のカップルの行動に周りの人間達も悲鳴をあげながら交差点から逃げ出す。

都会のど真ん中は秩序を失った人間達の阿鼻叫喚な悲鳴と喧騒に包まれた。

赤信号を無視して交差点を渡り出した人間達の姿をパトカーの中から警察官が拡声器を口元に押し付けて叫んだ。

「落ち着いてください。慌てず、落ち着いて、信号を無視しないで……！」

パトカーの車内からは空から落ちてくる蒼い光が見えないので警察官たちは突然起こった人々のパニックに意味が判らずに怒声を上げることしか出来なかった。

人間の理性を失った悲鳴が聴こえてくる。人間の恐怖に怯え逃げ惑う姿が視界に映る。

人間の、人間の、人間の……！！

「アハハハハハッ！ こんな妄想の世界は、ぜーんぶっ消えて無くなっちゃえばいいんだッ！」

狂った機械のように笑い、狂言を口走り、世界の破滅を懇願する人間の名前は速水健一。

理不尽な現実を呪い、憎しみ、破壊することを選んだ青年。

パトカーの中で突然、笑いだした健一に彼を挟んで両隣に座る警

察官の顔が引きつる。

その瞬間、健一が乗るパトカーに天空から堕ちる蒼い流星がピンポイントで衝突した。

一瞬の静寂の後にパトカーは天井に大穴を開けて中に居た人間を巻き込みながら爆発した。

第1話（後書き）

この作品の主人公は次元震によって現実からリリカルな世界に移動してしまった人間のお話です。

主人公の健一はリリカルなのはの知識は持ち合わせておりませんのでハーレムな世界を目指して頑張ります、といったオリ主ではありません。

元の世界に戻る手段を捜してリリカルなのはの世界で奮闘する男のお話を描きたいと思っております。

ご意見、ご感想をお待ちしております。

第二話

「おい、見てみるよ。ほら、一番前の席でまたアイツが座ってやがんの。マジで友達いねえのな」

「うわあ。ほんとだ。マジで笑えるんだけど。大学に来てまで友達がいないとかないわー」

……うるさい

「君ねえ。こんな基礎的な事が判らないでどうやったら卒研が出来るわけ？ もう一度、一年生からやり直した方がいいんじゃないの？」

「なーんで、俺がお前の卒研を手伝わなきゃならねえんだよ。教授から頼まれてもお断りだわ。でもなあ、どうしてもっていうんなら……ほら、誠意を見せろよ。お金でな」

……だまれ

「えーっと、うちの会社がやっていることに興味があるからうちを志望した、ねえ……。うちは社員全員が横つながりが大事な職場だから君みたいな暗い子はいらなかな」

「はっきりするとき。君、大学で友達いないでしょ？ あー言わなくていいよ。一目見れば判るからそういうの。人付き合いが出来るような人はうちじゃなくても採用しないよ」

……口を閉じろ

「おまえさあ。なんで飲み会に来たの？ あれほど来るなって念を押したよね？ それでも来るって馬鹿なの？ 死ぬの？」

「おまえが来たせいで飲み会の雰囲気がメチャクチャだよ。責任とってみんなの分のお金、てめえで払えよな」

……死ね

頭の中で浮かぶ映像と音声。それはまるで一人っきりの映画館でスクリーンに写る映画を鑑賞しているように感じられた。

それにしてもこの映画館はクソだ。人の神経を逆撫でするクソ映画しか放映できないクソ映画館だ。

映画の主演はもちろん俺。それで出演者は糞学生に糞教授、それから糞人事に糞チンピラ。

こんな胸糞悪い映画は生まれて初めてだ。映画を製作した監督の顔面にワンツーパンチの後で金的をくらわしたいぐらい胸糞が悪い。

「ねえ。どうだった君の映画は？」

映画の暗転したスクリーンにローマ数字の『？』という文字だけがやけに存在感を放ちながら映し出される。

「どうって、こんな糞映画は生まれた初めて見たよ。こんな映画を作った監督の顔を拝みたいぐらいだ」

速水健一は映画館の椅子に深く腰掛けてどこからともなく耳に聞こえてくる声に答えた。

「お気に召さなかったのかい？　それはそれは残念」

残念と全く思っていないのだろう。謎の声の主の口調はとても明るく弾んでいた。

「この映画は君のためだけのものだし、この映画の監督は君なんだよ。速水健一くん」

「なるほど。どうりで出来栄えが糞な筈だ」

「まだ続きがあるけど観て見る？」

「もういいよ。これ以上、こんなものを見せられたら泣いちゃうから」

「残念」

今度は本当に残念そうな沈んだ声で謎の声の主が答えた。

健一は椅子に腰掛けながら不快な気分を忘れるように一度深呼吸をすると両目を閉じた。

「茶番はもういいだろう。俺を元の場所に帰してくれないか」

「元の場所？　それは”どっち”のこと？」

瞳を閉じた深い闇の中で左右を中央で分断した光景が映る。

左半分には自分の部屋でキーボードを忙しそうに打ち込んでいる速水健一の姿が映っている。

右半分には警察官に両隣を挟まれ、両手には手錠をかけられた身動きが取れない速水健一の姿が映っている。

「もちろん。左の方に決まってるじゃん」

健一は迷うことなく左半分の自分の姿を指名した。

「残念。”そっち”は選べないよ」

左半分の光景が唐突に霧のように掻き消えると健一の視界に映るのは自分が警察に捕まっている姿だった。

「どうしてだよ？ ”あっち”が俺の元いた場所で合っている筈だし、俺が戻りたいのも”あっち”の世界だ。間違っても”こっち”じゃない」

「そう言われても困っちゃうな。何の因果か君は”あっち”の世界から”こっち”の世界に迷い込んでしまった迷子ちゃんなんだよね」

「俺は自分の意思で”こっち”に來たわけじゃない！ 知らないうちに”こちら”に連れて來させられて、俺がどんな理不尽な目に遭ったのか知ってるのかよ」

「うん、知ってるよ。ほら」

健一の視界にノイズが奔りまるでチャンネルが変わるように視界が切り替わる。

すっきりした画面に映るのは警察署の取調室で警察官に乱暴な暴力と身に覚えの無い罪で尋問されながら罵声を浴びせられている男の姿だ。

床で頭を抱えて蹲り「やめてください」と泣きながら何度も警察官に懇願している速水健一の姿が臨場感たっぷりに映し出されている

た。

「酷いよね。痛かったよね。苦しかったよね。悲しかったよね。とても、惨めだったよね」

「やめろ……」

「“あっち”から”こっち”に来てしまったただけなのに、自分には身に覚えの無い濡れ衣を着せられて堪ったもんじゃないよね」

「やめろって」

「ほら、君を弄っている警官の表情を見てみなよ。とーっても愉しそう。弱い物を虐めるのが大好きなのかな？ あ顔は本当の人間の中身を曝け出しているとは思わない？」

「そんなものを俺に見せるんじゃない！」

「ちょっと待ってよ」

健一は謎の声の制止する声を振り切って一人ぼっちの映画館から逃げ出した。

だが、映画館の出入り口の扉を開いた瞬間に健一は声を失う程の絶望を味わうことになる。

「やっと見つけたぞ、犯罪者」

それは先ほど視界に映る映像の中で見た顔にそっくりだった。それもそのはず、健一を精神的にも肉体的にも痛めつけた警察官の男が扉を開いた先で待ち構えていたのだから。

「ひいっ……！」

健一は悲鳴をあげると直ぐにその場で踵を返し警官から逃げようとしたが華奢な健一の肩をゴツゴツとした逞しい警官の手が掴む。

「逃がさねえぞ。さあ、今日も愉しい尋問タイムの時間だ」

「嫌だ、否だ、イヤだ、厭だ、嫌だああああっ！」

「まずは景気づけに一発いってみようか」

「ふざけるなあーっ！ あんたの”顔”なんて見たくないいいっ！
消えて無くなれええええっ！」

半狂乱になりながら健一は自分の肩に載った警官の手を振りほどく。そして警官に向かって頭突きを加えて警官を正面から押し倒して活路を切り開いた。

警官が尻餅をついている間に健一は肩で息をして過呼吸で息が苦しいほどに精神を乱して映画館の出口の扉に手を添えた。

その瞬間、扉を開いた健一の視界は白一色の目映い、目を開けることすら苦しいほどの光の渦に包まれた。

「おかえりなさい。現実への生還おめでとう」

意識が朦朧として呆然とする健一にかけられた言葉の第一声は難とも理解することのできないものだった。

頭の中で直接声が響いてくる。聴覚から得られる情報ではなくて頭の中から直接、何者かの声が聞こえるのだ。

「……あ……ん……た……誰……?」

「うん。まず初めに自己紹介したいところだけど、まず初めに君がおかれている状況を周りを見て確認したほうがいいんじゃないかな」

謎の声に促されるままに健一は自分の周囲の状況に目を向けた。

そこにあつたのは都会特有の高いビルの数々と渋滞のように車列を並べる車たち。そして遠巻きに健一を眺めている沢山の人間たちの視線。

「違う違う。そっちじゃないよ。下を見るんだ。君の足元だよ」

健一は頭に響く声に逆らうことなく自分の足元に視線を落とした。そこにあつたのはアスファルトの地面に横たわる人間が三人。

三人とも警察官のように警官の制服に身を包み、まるで死んでいるかのように身動きひとつしないし、呻き声ひとつあげることもない。

なるほど。合点がいった。三人の警官の首から上が無くなっているんだ。だから誰も喋らないし動かない。

健一はその凄惨な光景に納得がいくとその場から一步後退してみた。するとブチュと足元で何かが潰れる音が耳に聞こえた。そして男の苦痛に歪む悲鳴も聴こえた気がした。

「ああ、踏んじやった。今、君が踏んだのは『目玉』だよ」

健一が何を踏んでしまったのか彼の頭の中の誰かが簡潔に教えてくれる。

「目玉を踏み潰せるなんて一生に一度とない機会だから残りの目玉

も踏んじやいなよ。あと五つ残ってるよ」

とても軽い口調で残虐なことを健一の頭の中で何者かが告げる。健一はその声に従い視線を足元に移して三人の死体の傍を注意深く探した。

なんてことはない。死体の傍には割れた頭蓋骨の破片と頭を覆う肉片、それから脳漿とフグの白子みたいな何かが飛び散っており、その中に光を失った五つの目玉が転がっていた。

「左から順に数えて三つ目と四つ目の奴が君を痛めつけた警官の目玉だよ。これはチャンスだ。あの警官に仕返しできる絶好の機会だよ」

その言葉を聞いて健一は動いた。足元に転がる人間だったモノをグチャグチャと踏み潰しながら健一は前進する。

お気に入りの靴が汚れるが今は気にすることはない。あの警官に仕返しができるのだから。

健一は辿り着いた。首から上が無い警官の死体の傍で自分を見上げる光りが灯らない虚無の瞳を。

そして躊躇うことなく目玉を踏み潰した。左足で警官の元左目を、右足で警官の元右目を踏み潰した。

ブチュッブチュッとふたつの目玉が潰れる音が健一の耳に届く。

そして靴の裏に感じる感触をゆっくりと確かめながら更に地面を踏みにじる。

「あーっはっはっはっはっ！　ざまあみろ、ざまあみろ！　これがアンタの結末だ！　これがアンタの最後だ！　俺を弄る時にアンタもこんなに気分の良い想いをしていたんだな！」

胸の内からスツとするとても心地の良い気分健一の感情が高ぶ

った。

「俺はアンタに弄られる理由は無かったし、アンタを弄る理由なんてなかったのに。おっさんが悪いんだぜ？俺の話信じなかったおっさんが悪いんだからな」

残った目玉を余すことなく全部踏み潰した健一は汚れた自分の靴に眉をひそめると警官の死体で綺麗に足裏を拭った。

目を疑うような凄惨で残虐な光景に健一の一部始終を遠巻きに見守っていた人々は悲鳴を上げてその場から逃げ出す者がいれば、失神する者、携帯電話のカメラでその光景を撮影する者など様々な人間がいた。

「気が済んだかい？」

「ああ」

周りの騒がしい喧騒を無視して健一は頭の中で響く不思議な声に気分よく答えた。

「ところで、さっきから姿の見えないお前はいったい誰なんだ？」

「僕かい？僕は《ジュエルシード》」

「じゅえるしーど？なんだよ、それ」

聞いた覚えの無い単語に健一は怪訝そうに聞き返した。

「簡単に言うと途轍もない魔力を秘めた魔法の石ってところかな」

冗談にしても、もっとマシな嘘は吐けないのかと健一は苦笑する。

「魔法の石？　なんでそんなモノが俺の頭の中で喋ってんだよ。無機物が人間様と口を利いてんじゃねえよ」

勝手に許可も無く自分の頭の中で居座る謎の声の主に健一は啖呵をきった。

「そこは、ほら。魔法の石だから”意思”を持っているから喋れるんだよ」

健一の思考が途切れる。

今のは場を和ませる駄洒落のつもりだろうか？

「信じられないが冗談じゃないみたいだな。駄洒落は余計だったけど魔法とやらを信じよう」

「今のトコ笑うところだよ」

「さすがに”石”のジョークは人間の俺にはわからねえよ」

健一は笑えない自称”魔法の石”のジョークに苦笑する。そして三人の警官の死体をゴミの見るような目で眺めながら”魔法の石”に尋ねた。

「それで、これをやったのはお前か？」

「お前だなんて他人行儀だなあ。僕と君は運命共同体なんだ。だから僕のことは名前で呼んで欲しいなあ」

「じゃあ、じゅえるしーど。お前がやったのか？」

「違う違う。僕の名前は『ジュエルシード』シリアルナンバー『？』。だから”アインツ”と呼んで欲しいな」

馴れ馴れしいただの石っころの言動に健一は苛立ちながらも舌打ちをしてから再度”アインツ”に尋ねた。

「警官を殺したのはアインツなのか？」

「そうともいえるし、違うともいえる」

「どういうことだ？」

「僕はさっき君の願いをひとつだけ叶えたんだ。その願いの結果、この人間たちはみんな頭がお亡くなりになったんだよ」

「俺の願いだって……？」

健一は自分が何時、魔法の石に願いをかなえて欲しいと願ったのか記憶を掘り返してみたがそのような記憶は全くなかった。

頭を悩ましなが腕を組んで唸る健一にアインツが健一の頭の中で直接声を響かせる。

「君は望んだはずだよ。『あんたの”顔”なんて見たくない。消えて無くなれ』ってさ」

「あれは夢じゃなかったのか？ そんな願いは無効だ、無しだ！ それなら俺を元いた場所に還してくれよ！」

「あの時、言ったはずだよ。” あっち” の世界は選べないって」

「どうしてだよ！」

アインツの言葉に納得できない健一は声を荒げる。

「君の境遇が特殊すぎるから。僕は君を連れて次元を越えて他の多次元世界に移動させることはできるけど、君の” 元の世界” には連れてはいけない」

「なんでだよ」

「難しくて説明しづらいんだけど、君の世界は多次元世界みたいにハッキリと次元で別れた世界じゃなくて” 枝分かれ” した可能性の世界なんだよね」

「意味判らん」

サイエンスフィクション系のオカルト話にはまるで感心が無い健一にはアインツの説明は理解出来そうになかった。

「僕もよく判ってないんだ、ごめんよ。そしてその” 枝分かれ” した可能性の世界へ移動するには僕だけの力じゃ魔力が全然足りないんだ」

「それじゃあ、魔力が足りれば俺は元の世界に帰ることが出来るんだな」

「うん。可能性としてはゼロじゃない」

アインツの言葉を聞いて健一はその場で嬉しさのあまりに飛び跳ねた。

「じゃあじゃあ、アインツの魔力を世界の壁を越えるまで増やすにはどうしたらいいんだ？」

「正確には魔力を増やすんじゃなくて魔力を集めるんだ」

「魔力を集める？」

話がややこしくなってきたので健一は腕を組んでアインツの言葉を一字一句聞き逃すまいと耳を傾けた。

「そうだよ。なんの因果かこの多次元世界に《ジュエルシード》が僕を含めて21個の魔法の石が空から降り注いだんだ。だから他の《ジュエルシード》を君が集めればいい」

「こんな右も左も判らない世界で21個の石ころを捜し出せだって？ 無理を言うな」

無理なことを言っただけのけるアインツの言葉に健一は落胆する。

肩を落として落ち込む健一にアインツが元氣付けるように言った。

「無理じゃないよ。そのために僕がいる。どんなに離れていても《ジュエルシード》の魔力反応を感知できる僕がね」

「それが本当なら希望が見えてきたぞ」

「そう、諦めるにはまだ早いよ」

アインツの言葉を全て鵜呑みにして完璧に信じきっている健一はアインツに絶大な信頼を寄せた。

元の世界に戻る手段があるというのならアインツの言葉を信じて、この理不尽な世界で宝探しに興じるのも面白いことかもしれない。

「でも他の《ジュエルシード》を探す前に君にはやらなくちゃいけないことがひとつだけある」

「ん？　なんだよ」

「まずはこの状況から生き残ってみせることだね」

健一の頭上を騒がしい騒音をたててヘリコプターがグルグルと旋回している。

そして健一が居る都会の交差点の四方を警察の装甲車とパトカーが道路を封鎖して一般市民を交差点から締め出していた。

アインツとのお話にかまけている間に健一は警察とその機動隊に周囲を取り囲まれていた。

まるで映画のワンシーンのような状況にこの場の主役である速水健一は額に冷や汗を掻いて困った様子で頭を掻いた。

「この状況を俺一人でどうにかしろっていうのか？」

「そう言いたいけど僕と君は運命共同体だからね。微力ながら力を貸すよ”相棒”」

健一の頭の中でとても頼りになるアインツの声が響いた。

「僕が君に与えた特別な力は《HEAD SHOT》。すなわ

ち人間の頭を一撃必中で弾けたトマトにしちゃう魔法の力だ」

「そんなグロテスクな技はいらねえよ。俺がゲロ吐いちまう」

人間の頭がトマトが破裂するように飛び散る様を想像して健一は嫌悪感を抱いた。

「その心配は必要ないよ。魔法の力の対価に君のもつ”理性”を貰ったから。どんなにグロテスクでショッキングな場面も怖くないはずだ」

「しれっと勝手に俺の”理性”を奪わないでくれないか？」

健一のと承も得ずにアインツは勝手に人間の”理性”を魔法の力の対価として奪ってしまったようだ。

その事実には健一は飽きれることを通り越してアインツに不安を抱いた。

「だって君のメンタルはとても脆いから人間の頭が弾け飛ぶところなんて見たら失神してしまうだろう？ それじゃあせっかくの魔法の力が宝の持ち腐れだよ」

健一の内面を熟知したアインツの言葉に健一は押し黙る。

確かに《HEAD SHOT》なんて説明を聞くからに物騒な魔法の力を使えるほど健一の精神は強くは無い。

それを見通してアインツは健一から”理性”を奪ったというのなら健一がアインツに感謝する理由はあるって怒る理由はないはずだ。

「ほらほら、黙っていないで早く魔法の力を使いなよ。モタモタしていると君が《HEAD SHOT》《されて死んじゃうよ》」

仲間を殺されて殺気立つ警察官と機動隊の面々の憎しみと怨みのこもった視線を一点に受けて健一は息を飲んだ。

だが、その殺気を受け止めても健一の胸の内に憂いや悲しみ、それから人間を殺してしまった後悔の念は何一つ浮かんでこない。

これが”理性”を奪われるという意味なのか、と健一は落ち着いて理解した。そして自分に魔法の力を使うように強要するアインツに肯定の意味をこめて頷く。

「この世界は元から君のいるべき場所ではない。君の居場所はどこにも無いし、帰るところも無い。この世界で君は文字通り”独り”なんだ」

「言われなくても理解してる」

胸を刺すようなアインツの言葉に健一は悔しそうな顔をして同意した。

「でも安心していい。君が元いる場所に還るその瞬間まで僕はずっと君と共にある。まさに”運命共同体”だよ。君が死ねば僕も死ぬ。だから君には死んでほしくない」

「俺にはアインツの力が必要だ。元の世界に還るのにお前の力が必要だ。だから俺もお前に死なれたら困る」

これは契約。魔法の石とその力を必要とする人間との契約。

「それなら抗おう。この理不尽な世界で抗おう。君が息途絶えるまで僕も一緒に命を懸けて闘おう」

「闘ってくれ、力を貸してくれ、この俺の為だけにアインツ！」

健一の身体にとっても心地の良い高揚感が包まれる。

それはきつと魔法の力。健一の知らない、人間が理解出来ない不可思議な異能の力。

「額に手をかざして」

アインツの言葉に従って健一は自分の額に左手の掌をかざす。

掌がとても熱い。火傷してしまいそうなほど熱いエネルギーが健一の額から溢れ出していた。

健一の額には植物の種のような形をした碧眼の瞳を思わせる結晶体が額に埋め込まれていた。その結晶体が『アインツ』でもあり《ジュエルシード》である。

結晶体が目映いばかりの光の奔流を溢れ出してそれを見る者たちの目を惹いてやまない。

健一は額にある異物の感触を掌で確かめるように優しく触れた。

「《HEAD SHOT》起動確認。《type gun barrel》展開開始と同時に四方への制圧射撃を開始」

アインツが機械的な口調で健一に告げる。

すると健一の背後からいくつもの砲身が顔を覗かせた。それは銃というにはあまりにも繊細で綺麗な宝石のように輝く結晶体の集合体だった。

なにも無い空間から突如として現れた宙に浮いた”銃”のようなものに警官隊と機動隊たちは怖気づいて一歩後退した。

「これから一方的な虐殺が始まる。これから理不尽なまでの殺戮が行われる。でも悲しまないで。君達人間の尊い犠牲は健一の生きる

糧になるのだから」

アインツが警官隊と機動隊の人間たちの頭の中に直接語りかける。

「不思議な”因果”と奇妙な”縁”で結ばれてしまった僕達のこの先に幸がありますよに……」

一瞬の静寂。機動隊の一人の隊員が盾を構えて緊張のあまり唾を飲んだ。

「てえっ！」

健一の意味がアインツの引き金を引く。

この瞬間、日本史上初めての異能者との戦闘記録が歴史に記されることになる。

その戦闘記録には異能者『速水健一』の名前とその残虐非道な経歴から『人類の敵』と記されていた。

第二話（後書き）

ご意見・ご感想をお待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0645z/>

妄想の世界

2011年12月3日18時48分発行